第2回企画展

教育記者 相澤 熙と 德富蘇峰

久喜市公文書館

平成七年二月二十日(月)～三月三十一日(金)

ご　あ　い　さ　つ

久喜市公文書館は、平成５年10月に開館して以来、「歴史資料として重要な市の公文書その他の記録」を保存し、これらを計画的に整理し、公開しております。

その一環として、今年度から毎年２回の企画展を開催する予定ですが、今回の第２回企画展では、昨年12月に受贈したばかりの「相澤熙関連歴史的有価値資料」を紹介いたします。この資料群は、平成５年10月に久喜市在住の令息二郎（にろう）氏から寄贈のお申し出があり、調査検討した結果、295点を「歴史的有価値資料」として受贈することに決定したものです。

教育記者として一生を捧げた相澤熙（1880～1956）氏の活動をうかがうことのできるこの資料群は、次の２つの点において歴史的な価値を有していると考えられます。１つは、徳富蘇峰等の歴史的人物（特に国民新聞社関係）による自筆資料があるということです。そしてもう１つは、当時の教育界あるいは明治以来の教育史に関係する資料があるということです。後者に関係するものは、主に相澤熙氏自身が作成した資料のなかに多く見ることができます。

開催者といたしましては、皆様が様々な問題関心をもってご覧になった後、受贈した295点あるいはそれ以外の資料を駆使してさらに新しい事実を発見してくださることを願っております。

最後になりますが、今回の展示を行うにあたりまして、相澤二郎（あいざわにろう）氏のご理解とご協力をいただいたほか、多くの関係者のご協力をいただきました。この場をお借りして厚くお礼申し上げる次第です。

平成７年２月

久喜市公文書館長

相澤熙／徳富蘇峰関係略年表

和　暦	西暦	相　澤　熙　関　係　略　年　表	徳　富　蘇　峰　関　係　略　年　表
文久３年	1863		現在の熊本県水俣市に生れる
明治10年	1877		【平福百穂生】
明治13年	1880	現在の埼玉県鷲宮町に生れる	
明治19年	1886		『将来之日本』を出版する／【池部鈞生】
明治20年	1887		民友社を設立し、『国民之友』（～1898）を発刊する
明治23年	1890		国民新聞社を設立し、『国民新聞』を発刊する
明治38年	1905		日比谷焼き討ち事件により、国民新聞社が焼き討ちにあう
明治40年	1907		【平福百穂国民新聞社に入社】
明治43年	1910	国民新聞社に入社する	
明治44年	1911		貴族院議員に選ばれ、政界に進出する
大正２年	1913		政界より退く
大正３年	1914		【池部鈞国民新聞社に入社】
大正８年	1919	財団法人国民教育奨励会専務理事に就任する	『国民新聞』一万号を記念して、財団法人国民教育奨励会を設立する
大正12年	1923		関東大震災により、国民新聞社及び民友社が全焼する
昭和２年	1927	全米教育会議（シアトル）、万国図書館会議（エジンバラ）に出席する	
昭和４年	1929	国民新聞社を退職し、大阪毎日新聞社・東京日々新聞社の客員となる	国民新聞社から退き、大阪毎日新聞社・東京日々新聞社の社賓となる
昭和５年	1930	蘇峰会幹事になる	蘇峰会が設立される
昭和８年	1933		【平福百穂没】
昭和９年	1934	国民教育奨励会専務理事を退く	国民教育奨励会会長（1927～）を退く
昭和10年	1935	蘇峰会の常任幹事に就任する 汎太平洋国際会議（東京）の事務総長として活躍する	蘇峰会に常任幹事を置く
昭和12年	1937	第7回世界教育者会議（東京）に出席する	
昭和15年	1940	相澤熙君教育記者三十年功労感謝会が催される	
昭和18年	1943		文化勲章を授与される（戦後辞退する）
昭和20年	1945	蘇峰会が解散される	戦犯容疑で拘束される／蘇峰会を解散する
昭和22年	1947		証拠不十分のため、戦犯容疑が解除される
昭和26年	1951		蘇峰会が再び設立される
昭和29年	1954	埼玉県久喜町に新築移転する	
昭和31年	1956	埼玉県久喜町において死去する（享年77歳）	
昭和32年	1957		神奈川県二宮町において死去する（享年95歳）
昭和44年	1969		【池部鈞没】

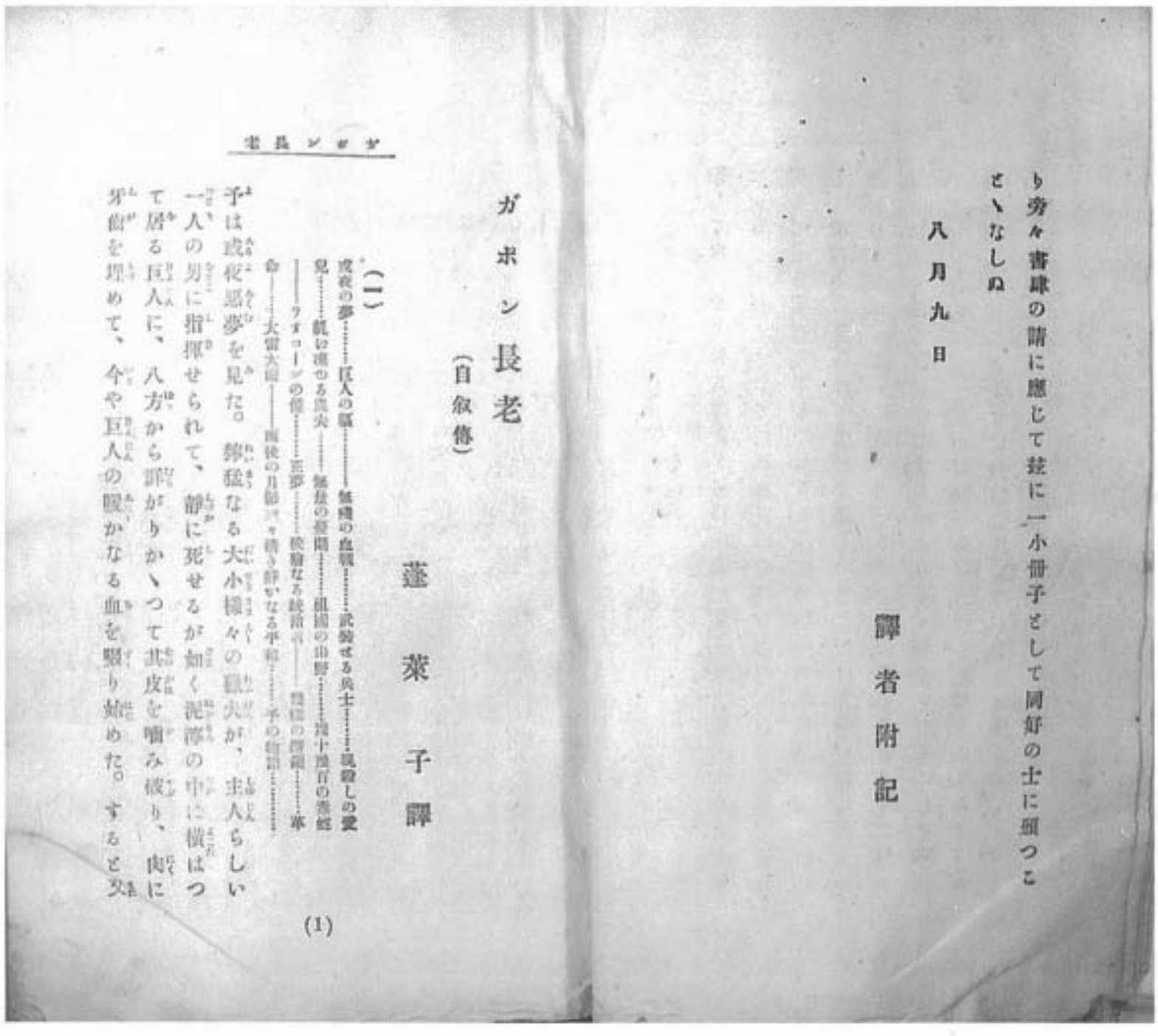
Ⅰ　相澤凞の著作

相澤二郎氏は、父親である凞について『相澤凞　追想記』という本を昭和63年に発表しています。この中で凞の著書について、「新聞記者として、日本の大正・昭和（終戦迄）における教育評論家として、雑誌等に書かれたものは、凞以上に多数を書いた人はなかったと思われる」と、記しています。また、平成３年には、凞が発表した論文・論説等の一部を『街頭の教育者』という1冊の本にまとめて刊行しています。

生前、凞は、昭和５年に『世界教育の旅』（資料３）、昭和23年に『ＰＴＡの知識と運営』、そして昭和27年に『日本教育百年史談』（資料６）という３冊の教育関係の図書を著しています。

また、凞が生涯師として尊敬していた蘇峰に関しては、昭和17年に『最近の蘇峰先生』（資料４）、昭和18年に『金石留痕　老蘇八十一』（資料５）という２冊の図書を刊行しています。この２冊はどちらも非売品であるため、一般には流通していません。

これらの作品は、すべて明治44年の国民新聞社入社以降に著されたものです。しかし、実はそれ以前にも数冊の作品を発表しています。国民新聞社入社以前の凞は、最初、社会主義運動に加わろうとして幸徳秋水や堺利彦等の平民新聞社に出入りしています。その後、堺利彦の紹介で読売新聞社に入社し、そこで書いた短編小説がちょっと評判になったので小説家を志しました。この小説家を志していた時代に制作発表したのが、「露国の農民」、「田舎娘」、「なさぬ仲」等です。また、翻訳小説『ガポン長老』（資料２）、地誌『樺太事情』（資料１）等は図書として刊行もされました。


り旁々書肆の請に應じて茲に一小冊子として同好の士に頒つこゝなしぬ

八月九日

譯者附記

ガポン長老

（自叙傳）

蓬萊子譯

（一）

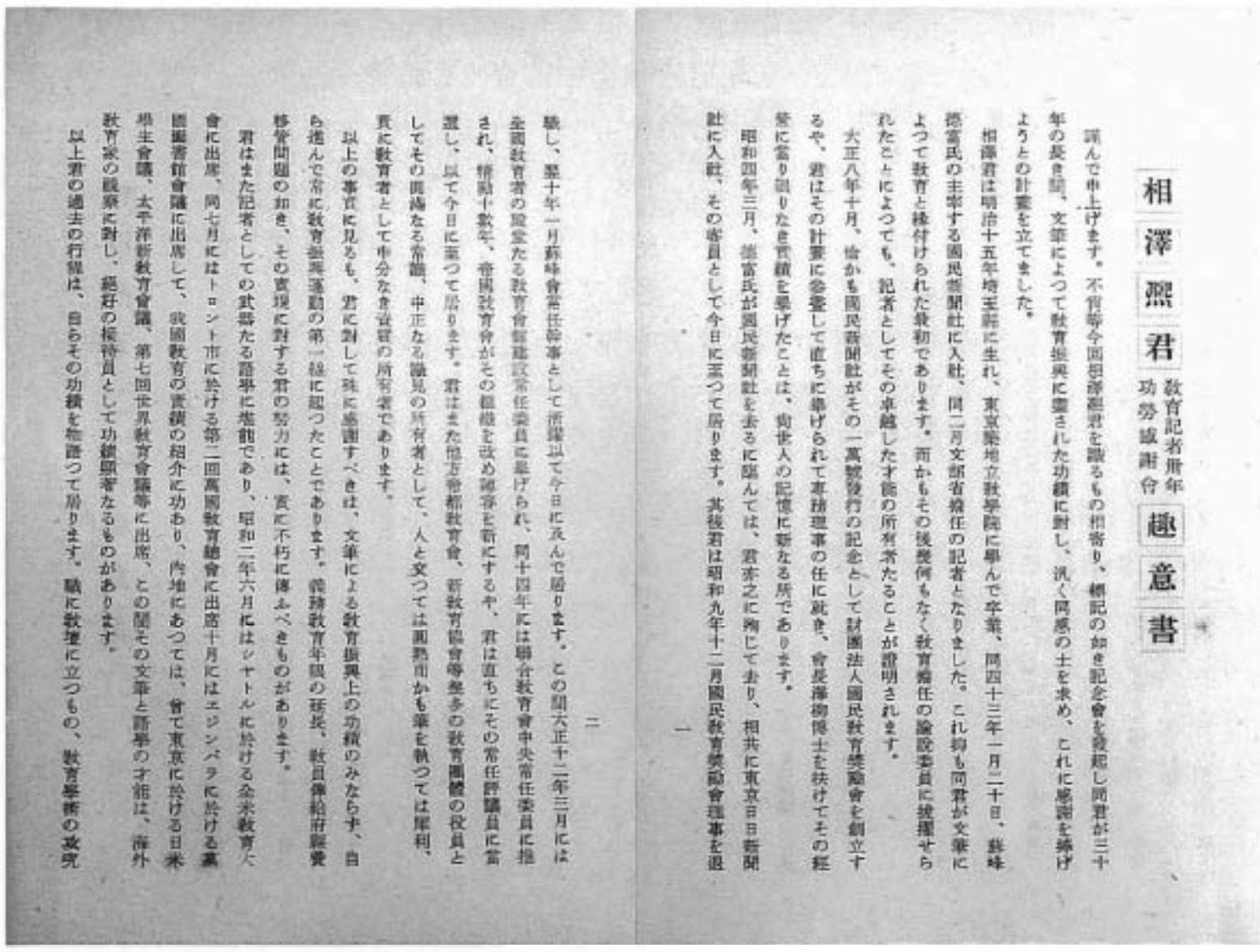
（1）

2　『ガポン長老』

日露戦争の時に、冬宮に押し寄せた僧ガポンの自叙伝を翻訳したものです。

大逆事件をきっかけにして、発禁処分をうけます。

II　教育記者相澤凞



相澤凞君　教育記者卅年功勞感謝會　趣意書

謹んで申上げます。不肖等今回相澤凞君を識るもの相寄り、標記の如き記念會を發起し同君が三十年の長き間、文筆によつて教育振興に盡された功績に對し、汎く同感の士を求め、これに感謝を捧げようとの計畫を立てました。

相澤君は明治十五年埼玉縣に生れ、東京柴地立教學院に學んで卒業、同四十三年一月二十日、蘇峰德富氏の主宰する國民新聞社に入社、同二月文部省嘱任の記者となりました。これ抑も同君が文筆によつて教育と縁付けられた最初であります。而かもその後幾何もなく教育嘱任の論說委員に拔擢せられたことによつても、記者としてその卓越した才能の所有者たることが證明されます。

大正八年十月、恰かも國民新聞社がその一萬號發行の記念として財團法人國民教育奬勵會を創立するや、君はその計畫に參畫して直ちに擧げられて專務理事の任に就き、會長澤柳博士を扶けてその經營に當り盡りたき實績を擧げたことは、衆世人の記憶に新なる所であります。

昭和四年三月、德富氏が國民新聞社を去るに臨んでは、君亦之に殉じて去り、相共に東京日日新聞社に入社、その嘱員として今日に至つて居ります。其後君は昭和九年十二月國民教育奬勵會理事を退職し、翌十年一月蘇峰會常任幹事として活躍以て今日に及んで居ります。この間大正十二年三月には全國教育者の盟主たる教育會館建設常任委員に擧げられ、同十四年には聯合教育會中央常任委員に推され、情熱十數年、帝國教育會がその組織を改め連合を新にするや、君は直ちにその常任評議員に當選し、以て今日に至つて居ります。君はまた他方帝都教育會、新教育協會等數多の教育團體の役員としてその眞摯なる常識、中正なる識見の所有者として、人と交つては圓熟且かも筆を執つては犀利、眞に教育者として申分なき資質の所有者であります。

以上の事實に見るも、君に對して殊に感謝すべきは、文筆による教育振興上の功績のみならず、自ら進んで常に教育振興運動の第一線に起つたことであります。義務教育年限の延長、教員俸給府縣費移管問題の如き、その實現に對する君の努力には、實に不朽に傳ふべきものがあります。

君はまた記者としての武器たる語學に堪能であり、昭和二年六月にはシヤトルに於ける全米教育大會に出席、同七月にはトロント市に於ける第二回萬國教育聯會に出席十月にはエジンバラに於ける萬國圖書館會議に出席して、我國教育の實績の紹介に功あり、内地にあつては、曾て東京に於ける日米學生會議、太平洋新教育會議、第七回世界教育會議等に出席、この間その文筆と語學の才能は、海外教育家の觀察に對し、絶好の接待員として功績顯著なるものがあります。

以上君の過去の行程は、自らその功績を物語つて居ります。職に教壇に立つもの、教育學術の攻究

8　『久敬録』

「長い間少しも変わることなく、自ら街頭の教育者をもって任じ、教育記者としての任務に向かって、わが一生の精力を傾倒してきた」（『街頭の教育者』所収「街頭の教育者」より抜粋）とか、「殆ど私の一生は、先生の指導の下に生き、先生に依っていささか教育のために微力を献けることを得た訳である。今後どういうことがあろうとも、私の方から先生の許を離れて行こうなどとは、思いも寄らぬ事である」（『街頭の教育者』所収「蘇峰先生と私」より抜粋）とかいった言葉が、教育記者に対する、そして蘇峰に対する凞の気持ちを物語っています。

凞が教育記者になったのは、国民新聞社に入社してすぐに文部省にまわされたのがきっかけだったと言うように、この国民新聞社への入社こそが、凞にとって人生の大きな転機になったことは間違いありません。

さて、教育記者としての凞が、最も華やかな舞台にあがったのは、昭和10年に東京で行われた汎太平洋教育会議の事務総長として会議一切を執りしきったことでしょう。この会議の様子は新聞等にも取り上げられ、当時かなりの出来事だったことがうかがえます。国内のほとんどの教育関係団体に積極的に参加していた凞は、英語に堪能であることも幸いして様々な国際会議にも出席しています。これらのことが、この抜擢につながったのでしょう。

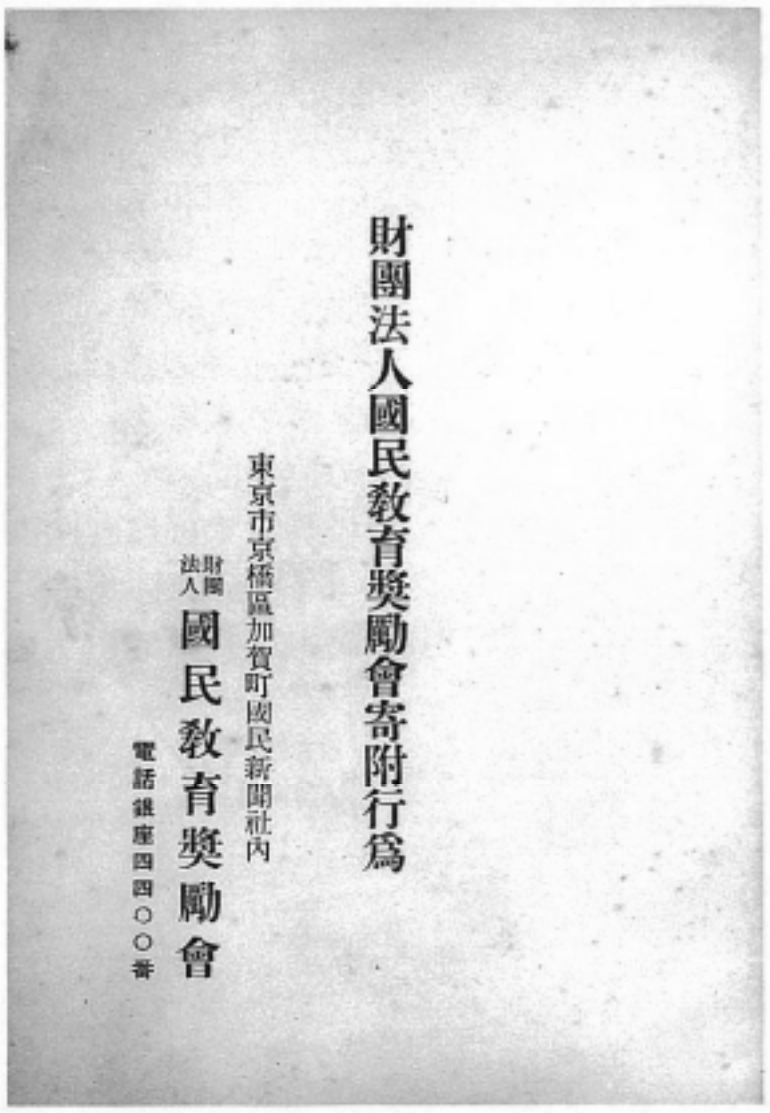
一方、凞が教育記者として最もうれしかったことは、昭和15年に友人たちが集まって、凞の教育記者30周年を祝ってくれたことでしょう。このときの様子は、その後『久敬録』（資料8）という小冊子にまとめられています。これをみると、会の顧問には、蘇峰はもちろんのこと、伯爵牧野伸顕（まきののぶあき）、男爵一木喜徳郎（いちききとくろう）等の他、前文部大臣の方々の名前をみることができます。そして当日200名近くの出席者があったことからも、当時いかに幅広い人たちに、凞の教育記者としての功績が認められていたかがわかります。

III　財団法人国民教育奨励会

大正８年に国民新聞社は、『国民新聞』発刊1万号を記念して、財団法人国民教育奨励会を設立します。そして凞はこの会の専務理事に就任します。初代会長には沢柳政太郎（1865～1927）が就きますが、昭和2年の急逝にともない、２代会長に蘇峰が就任します。

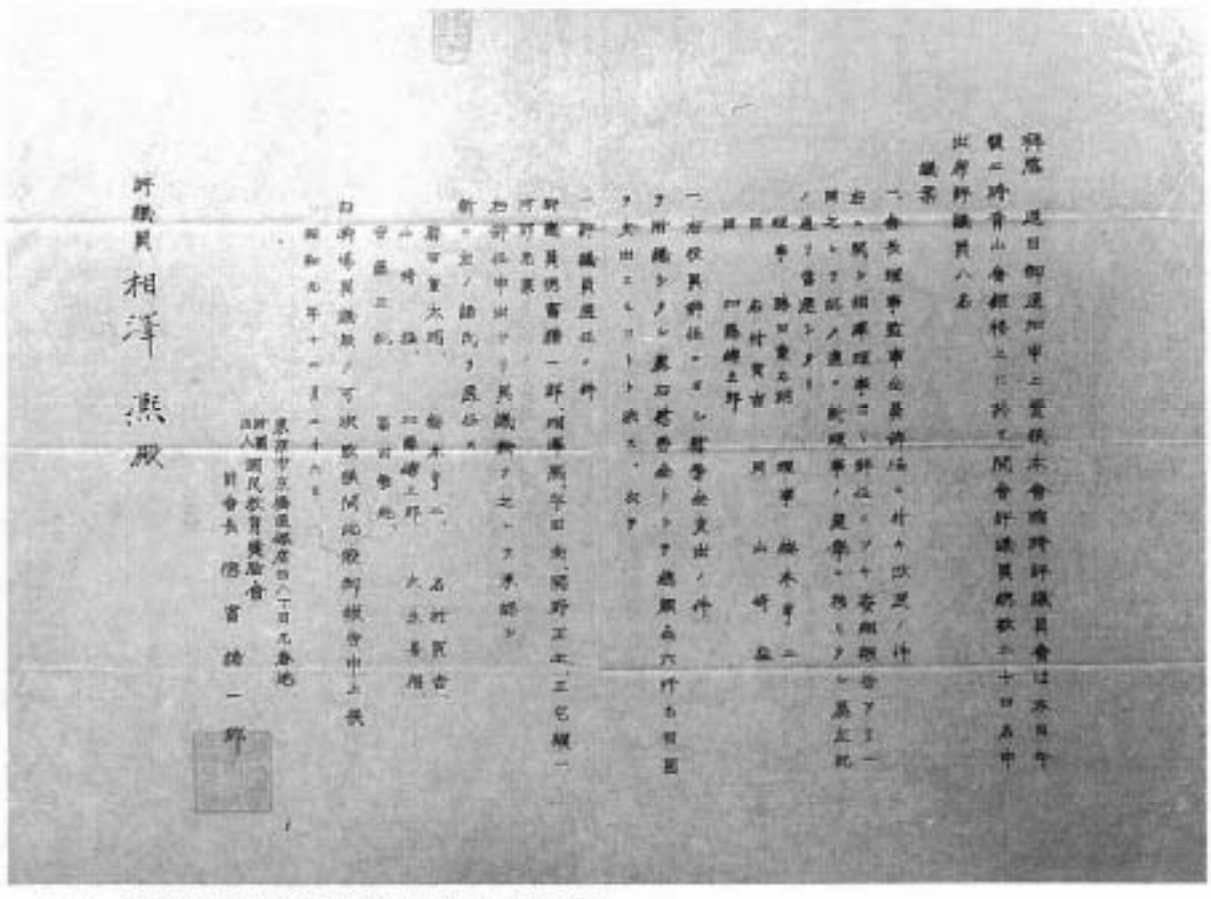
この会は、国民教育奨励のため、主として国民教育に従事する者の精神的物質的向上発展に資するを以て目的とし、①教員の表彰、②国民教育に関する研究奨励並びに教育視察費補助、③講習会等の事業を行うことが『財団法人国民教育奨励会寄附行為』（資料12）の中で触れられています。また、関東大震災時の臨時措置として、殉難教員遺族の救済や臨時国民小学校の開設等も行っています。教育記者としてのその後の凞の活動が、このような活動から根付いていったのでしょう。

しかし、昭和４年に蘇峰や凞が国民新聞社から退いたことも関係して、ついに、昭和９年には会の運営から手を引くことになります（資料17・18・19）。その時のことを、凞は次のように語っています。


財團法人國民教育奨勵會寄附行爲
東京市京橋區加賀町國民新聞社内
財團法人 國民教育奨勵會
電話銀座四四〇〇番

11　『財団法人国民教育奨励会寄附行為』

「国民新聞創刊一万号の記念事業として起されたこの会の成立からいうと、我々が国民新聞社を去った以上、併せてこの会の理事者たる地位をも去るのが当然と考えた（中略）そこで本会は昭和九年十二月二十日青山会館に於いて臨時評議員会を召集。徳富会長以下理事、監事の総辞任を認め、新たに国民新聞社より推薦されたる数名の理事を選挙して散会。これでこの会は、ついに我々の手から離れた。」　（『街頭の教育者』所収「蘇峰先生と私」より抜粋）


評議員 相澤凞殿

17　相澤凞宛臨時評議員会内容通知

Ⅳ　徳富蘇峰

①　揮毫（きごう）

本館に収蔵している蘇峰の揮毫は、老蘇（昭和15年～昭和20年）→頑蘇（昭和20年～昭和25年頃）→蘇叟（昭和25年頃～昭和32年）といった号の変遷が、おおよそみてとれます。これ以外の「蘇峯」(資料27)、「猪」(資料28)、「蘇峯老人」(資料29)等の号は、昭和15年よりも前の資料に見ることができます。

また、蘇峰は揮毫によく富士の絵を描いています。本館にも7点存在しますが、今回の展示では自画像の入った揮毫をすべて陳列してみました（資料20～26)。これらは、蘇峰84～88歳の頃に集中していて、すべて頑蘇の号を用いていた頃のものです。

一方、掛軸になっている揮毫(資料27～34)は、すべて終戦前に書かれたものと思われます。

20　頂天立地

21　一襟豪気

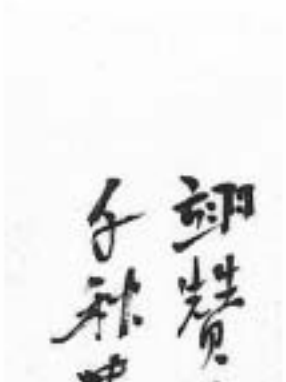
22　無功徳

23　数声清磬是非外
一個閑人天地間

24　物我両忘

25　好漢君亦意中之人

26　快男児

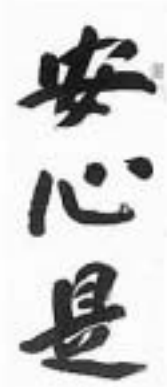


31 翊賛皇謨志有餘　肯比流俗要時譽
千秋史筆誰知己　著作人間未讀書

30 平生一片心

29 養気得其和

28 孤忠許国一身軽　誰為吾皇策太平
醒眼看来多怪事　満腔憂憤迎新正



27 安心是薬更無方

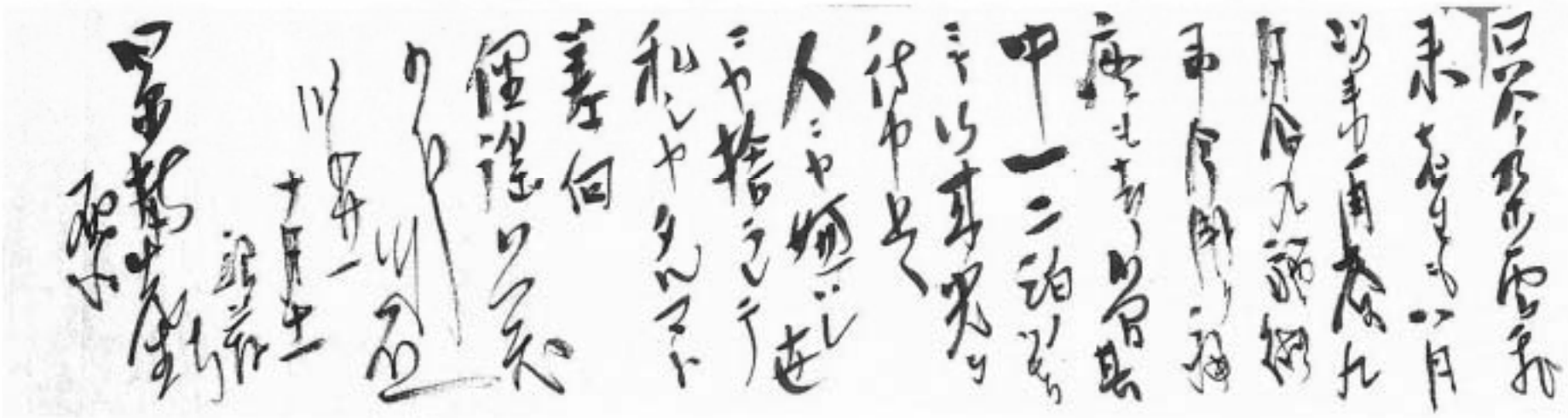
34 聖徳太子

33 葩経万葉不詠釈迦孔子不知
咄何物蘇翁喫得這滋味喝

32 苦雨終風万恨長　肯借猿鶴論行蔵
老来惟愛清閑趣　栖息晩晴一艸堂

② 書簡

昭和21年には、「人ニヤ嫌ハレ世ニヤ捨ラレテ私シヤタルマト差向」（資料35）と書かれています。また、昭和23年の書簡では、「老去リテ困ルコトトテナカリケリ熱サ寒サニ病気貧乏」とか「喬木易吹風世ノ中モウルサキモノニ御座候」（資料36）等とあります。戦後の蘇峰の孤独で厭世的な気持ちをみることができます。



35　10月11日付け相澤凞宛書簡

36　8月5日付け相澤凞宛書簡

37　2月5日付け相澤凞宛書簡

昭和21年には、「国民教育会ト蘇峯会トハ尊台ノ二大事業ナレバ是非老生健全ノ中ニ御記述希望仕候」（資料37）と書かれています。また、昭和23年の書簡でも「国民教育奨励会ト蘇峯会トノ歴史ハ貴兄ニ取りても大切ノ歴史ナレバ是非簡明ニ記録被成置候様希望候」（資料38）と繰返し凞に希望しています。

38　4月8日付け相澤凞宛書簡

V　国民新聞社の仲間たち

①　蘇峰会

40　年月日未詳徳富猪一郎書簡

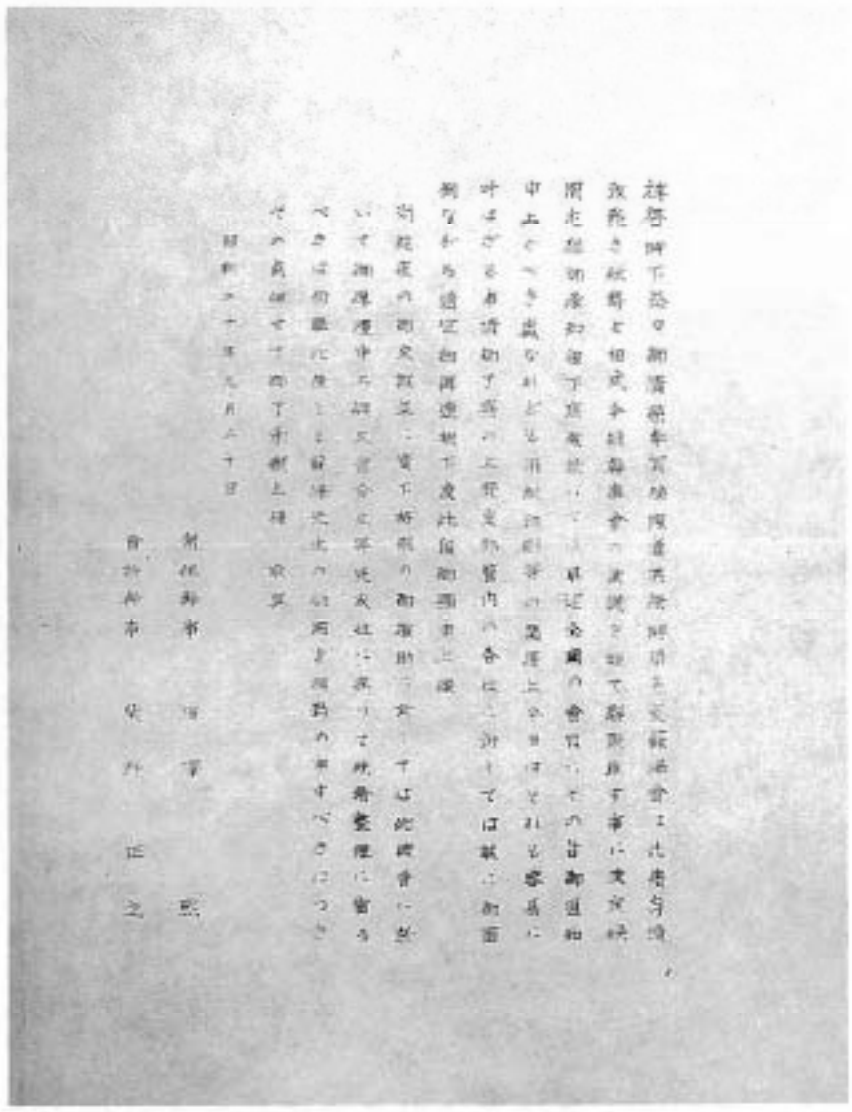
蘇峰会は、国民新聞社を退いた蘇峰を慰労、激励することが最初の出発点であったようです。昭和５年のこの時は、会長に上田万年（1867～1937）が就任し、凞も幹事として名を連ねています。しかしその後、全国的な組織へという希望が多くでてきたため、会の本部をしっかりとまとめていくために常任幹事を置くことになり、凞が就任します。昭和10年のことです。

表紙写真は、昭和12年の全国蘇峰会大会記念において描かれた蘇峰の絵像に、凞自身が昭和20年の春に自作の短歌を書き入れたものです。

終戦とともに、蘇峰が戦犯容疑で拘束されたことにも関係して、会の存続は難しくなり解散を余儀なくされます。その際、蘇峰は凞に1通の書簡をしたためています(資料40)。そこには、「従来、蘇峯会ノ為メニ多大ノ御援助、成し下せられ候段、感戴惜しむ能ず」と記されています。

その後、９月26日には、解散の決定を会員に伝える通知（資料41）が、常任幹事と会計幹事の連名で出されています。

しかし、昭和22年に証拠不十分で蘇峰の戦犯容疑が解除されたことも手伝って、昭和26年３月15日に再出発することになります（資料42)。



41　蘇峰会解散通知

42　蘇峰会再出発の辞

② 平福百穂

43 物々しく夜空に雲波ひろこりぬ
氷雨か降らむ坂急きのぼる

箱書
蓋表「百穂和歌與畫一筆」
蓋裏「昭和念四　七月　於晩姓艸堂　頑蘇八十七」
（2印あり）

百穂は、大正9年2月号の『アララギ』に「柩車」の題で8首の短歌を発表しています。その中に「ものものしく夜空に雲はひろごりぬ氷雨か降らむ坂急きのぼる」という歌があり、今回の資料と関係があるものと考えられます。

また、昭和24年に蘇峰が箱書をしています。これは、凞が軸装した際に書いてもらったものと伝えられています。箱書の内容については、左のとおりです。

③ 池部鈞

「かつて漫画の大家池部鈞君が、うしろから私の歩いていく姿を描いて、私にくれた」と言ったこの絵（資料44）のことを凞は、「ふとい線で、正方形に似た胴に、頭と、鞄をさげた手と、足を二本つけた格好の悪さ。しかるに、それが私に生き写し。」（『街頭の教育者』所収「自画像」より抜粋）と評しています。

44 相澤　凞

45 鍾馗大臣

46 猫

展示資料一覧

番号	和暦［西暦］	資料名	文書番号
Ⅰ	相澤熙の著作		
1	（明治38年［1905］）	『樺太事情』	165
2	明治40年［1907］	『ガポン長老』	160
3	昭和８年［1933］	『世界教育の旅』（再版）	161
4	昭和17年［1942］	『最近の蘇峰先生』	162
5	昭和18年［1943］	『金石留痕　老蘇八十一』	163
6	昭和27年［1952］	『日本教育百年史談』	164
Ⅱ	教育記者相澤熙		
7	昭和15年［1940］	相澤熙君教育記者三十年功労感謝会参列者芳名簿	151
8	昭和16年［1941］	『久敬録』	153
9	昭和11年［1936］	『汎太平洋教育会議報告書』	―
10	昭和14年［1939］	『第七回世界教育会議誌』上下	―
Ⅲ	国民教育奨励会		
11		『財団法人国民教育奨励会寄附行為』	122
12	大正11年［1922］	『婦人文化講演集』	106
13	大正11年［1922］	『教育五十年史』（８版）	107
14	大正11年［1922］	『大戦後の欧米教育』	108
15	大正13年［1924］	『現代文化と教育』（再版）	110
16	昭和５年［1930］	『丁抹の農村と其の教育』（13版）	113
17	昭和９年［1934］	相澤熙宛臨時評議員会内容通知	119
18	昭和９年［1934］	財団法人国民教育奨励会引継契約書	115
19	昭和９年［1934］	財団法人国民教育奨励会事務引継書類	120
Ⅳ	徳富蘇峰		
①	揮毫		
20	（昭和21年［1946］）	頂天立地	44
21	（昭和21年［1946］）	一襟豪気	48
22	（昭和21年［1946］）	無功徳	49
23	（昭和22年［1947］）	数声清磬是非外　一個閑人天地間	52
24	（昭和23年［1948］）	物我両忘	62
25	（昭和24年［1949］）	好漢君亦意中之人	69
26	（昭和25年［1950］）	快男児	72
27	（大正８年［1919］）	安心是薬更無方	30
28	（大正13年［1924］）	孤忠許国一身軽　誰為吾皇策太平 醒眼看来多怪事　満腔憂憤迎新正	31
29	（昭和11年［1936］）	養気得其和	32
30	（昭和15年［1940］）	平生一片心	33
31	（昭和16年［1941］）	翊贊皇謨志有餘　肯比流俗要時譽 千秋史筆誰知己　著作人間未読書	34
32	（昭和18年［1943］）	苦雨終風万恨長　肯偕猿鶴論行蔵 老来惟愛清閑趣　栖息晩晴一艸堂	35
33		葩経万葉不詠釈迦孔子不知　咄何物蘇翁喫得這滋味喝	86
34		聖徳太子	88
②	書簡		
35	昭和21年［1946］	10月11日付け相澤熙宛書簡	46
36	昭和23年［1948］	８月５日付け相澤熙宛書簡	57
37	昭和21年［1946］	２月５日付け相澤熙宛書簡	42
38	昭和23年［1948］	４月８日付け相澤熙宛書簡	55
Ⅴ	国民新聞社の仲間たち		
①	蘇峰会		
39	昭和12年［1937］	全国蘇峰会大会記念徳富蘇峰絵像	133
40	（昭和20年［1945］）	年月日未詳徳富猪一郎書簡	87
41	昭和20年［1945］	蘇峰会解散通知	126
42	昭和26年［1951］	蘇峰会再出発の辞	127
②	平福百穂		
43		物々しく夜空に雲波ひろこりぬ 氷雨か降らむ坂急きのぼる	98
③	池部鈞		
44		相澤熙	3
45		鍾馗大臣	1
46		猫	2

第2回企画展「教育記者相澤凞と徳富蘇峰」に出てくる主な人々

（主な参考文献には、展示資料は含めていません。）

相澤（あいざわ）　凞（ひろし）（1880～1956）

大正から昭和にかけて活躍した教育記者。号は、「如楓」、「蓬萊子」、「景楠」、「景楠外史」、「蓬村」、「蓬村外史」等を用いている。

平民新聞社、読売新聞社、国民新聞社、大阪毎日新聞社・東京日々新聞社等で活動している。

主な参考文献　相澤二郎編『街頭の教育者』（圭文社）
相澤二郎『相澤凞　追想記』（学文社）

徳富蘇峰（とくとみ そほう）（1863～1957）

本名は「猪一郎」で、「蘇峰」は号である。明治から昭和にかけて活躍したジャーナリスト。戦後は、主に文筆活動に専念している。また、その他にも政治家、言論人、歴史家等様々な面をもっている。小説家徳富蘆花の実兄でもある。

主な参考文献　早川喜代治『徳富蘇峰』（徳富蘇峰伝記編纂会）
ビン・シン（杉原志啓訳）『評伝　徳富蘇峰』（岩波書店）

平福百穂（ひらふくひゃくすい）（1877～1933）

本名は「貞蔵」で、「百穂」は号である。丸山四条派の教えをうけた父をもつ日本画家。国民新聞社時代は、議会スケッチ等の挿絵で活躍した。また、長塚節や斎藤茂吉等の教えをうけたアララギ派の歌人でもある。

主な参考文献　平福百穂『歌集　寒竹』（岩波書店）

池部（いけべ）　鈞（ひとし）（1886～1969）

洋画家。国民新聞社時代は、平福百穂のもとで政治・社会・議会・相撲等の漫画を描き活躍する。映画俳優池部良氏の実父にあたる。

主な参考文献　池部鈞『ニャンチュウ物語』（朋文堂）
池部良『そよ風ときにはつむじ風』（毎日新聞社）所収
「鍾馗様」・「三味線の皮」等

表紙写真　39　全国蘇峰会大会記念徳富蘇峰絵像

協力者（敬称略・順不同）
相澤二郎、池部　良、平福一郎
埼玉県立川越図書館
埼玉県立近代美術館
埼玉県立文書館

公文書館利用案内

開館時間：9：00～17：00
休館日：土曜日、日曜日、国民の祝日、年末年始
（企画展の期間中は、日曜日も開館します）
交通案内：ＪＲ宇都宮線・東武伊勢崎線
久喜駅西口下車徒歩17分（市役所西側）

発行：平成7年2月　編集：久喜市公文書館　〒346 久喜市下早見85-1　☎0480-23-5010